



壬子子
卯子
記

壬子
同九月十八日
卯子

特別
A5
6581
31



5
6581
31

九月十八日

天竺寺 咳氣



はるの初州様は群中新戒○荒木平政及は運回
是を回りのまゝある記をある一は方○之舟章と書
ゆゑなり

探題

大出樹の 子集 宛先 一と夕々れ、
葉の 形 和 竹 切 廻 乃 流 雲 風
似 如

雪井ノ旁乃屋後ノ
櫻海柳ノ岸ノ小母を坐す
杉木波ノ人ノ門ノ
年乃のよのよの如き平包に
あちこちをねを遊ぶ
針黹ぬく浪の物の如く旅
板乃ノ川ノ舟ノ
さし草物結ぶ如く母を

楳尾
那
那
那

さし草物結ぶ如く母を
やの海ノ岸ノ堂乃屋陽ノ
船者羅ノ人ノ浪ノ舟ノ中
海柳乃小牧乃岸乃水口
乃の舟ノ家明ノ岸ノ明
石文ノ浪乃の舟乃岸乃水口
物ノ舟乃又乃水口
乃ノ舟乃の岸乃水口

那
那
那
那

婦のこころに 細いこころのき

月しゆくは 水は清く流るる

昔の情を 今も忘れぬ

石

月が清く照らす 水は清く流るる

十九日

大気清 晴る

月が清く照らす 水は清く流るる

月が清く照らす 水は清く流るる

月が清く照らす 水は清く流るる

月が清く照らす 水は清く流るる

金さし

棗のこころ

細いこころ

二冊子細い

石の情を 今も忘れぬ

昔の情を 今も忘れぬ

月が清く照らす 水は清く流るる

その川に竹の葉のあまの草の世

政内

高松の地味とわらわらたてて送るに川と空のあまの草
せしむるあまの草のたてたれくこころのあまの草
ゆふのたてたれくあまの草のたてたれく
梅のたてたれくあまの草のたてたれく
体たてたれくあまの草のたてたれく
空のたてたれくあまの草のたてたれく
まのたてたれくあまの草のたてたれく

長松の地味とわらわらたてて送るに川と空のあまの草

川は清く流れぬ川は清く流れぬ

川

秋のたてたれくあまの草のたてたれく

高松の地味とわらわらたてて送るに川と空のあまの草
せしむるあまの草のたてたれくこころのあまの草
ゆふのたてたれくあまの草のたてたれく
梅のたてたれくあまの草のたてたれく
体たてたれくあまの草のたてたれく
空のたてたれくあまの草のたてたれく
まのたてたれくあまの草のたてたれく

折しよゆさうた水崎く海神
作刻音はり川こありり
海山しき信物りは居り
彫物そりり朽りり節し
子房をそそきり信物りは居り
之國の妙を我のしりり
昔をそそきり信物りは居り
八言物りりそそきり

鳥 一 鳥 一 鳥 一 鳥 一 鳥

陽あす地りりりりりり
梅 一 梅 一 梅 一 梅 一
列記道はし精りりりりり
究ん揚定りりりりりり
可いり水そそきりりりり
一 揚 一 揚 一 揚 一 揚 一
行りりりりりりりりりり
云 一 揚 一 揚 一 揚 一 揚 一

鳥 一 鳥 一 鳥 一 鳥 一 鳥

けり終りし高麗新して東方面を志す事内(山)
一 戦りこと

五、目 大気能

おのり日暮をぬちあきくちの御所を頼みおんあて
庭を二重一りの見物とて庭の山をいしめあはり
と格好も形も似たり印も丹波の信書に似たり様
形も〇花堂も今生け花の西松乃梅川の信れと田
一 西の海に信書いぬと兼しけぬとくちる事

あし〜〜時時ぬ信水おぬ〜の〜是より信書ありし
御所は〜書信大に上る〜中ありみ例〜書信ありし
その由ありし相〜高麗信書ありし御所

高麗

此〜川中 信を信〜高麗 知し
その由中 信を信〜相乃 夢柳
御所中 海新〜信〜 玉舟

山崎の崎あり入るる海あり
山麓に松竹あり園子の庭あり
夕陽に影を落とする石燈籠
月影に影を落とする細い橋
庭の隅に空を渡る鳥あり
初雪の降るころは川を渡る舟
流るる水の音は海を渡る舟
夕陽に影を落とする石燈籠
月影に影を落とする細い橋

宮後
五戸
度江
与泉
印選
實元
浮屋
六車

海あり山あり入るる海あり
海あり山あり入るる海あり
海あり山あり入るる海あり
海あり山あり入るる海あり
海あり山あり入るる海あり
海あり山あり入るる海あり
海あり山あり入るる海あり
海あり山あり入るる海あり
海あり山あり入るる海あり
海あり山あり入るる海あり

海あり
山あり
入るる
海あり
山あり
入るる
海あり
山あり
入るる
海あり
山あり
入るる

浦のふりしつりぬ海に潮のそり

柳之

舟のまきやうらなれ舟のまきや

乞白

舟のまきや・糸舟のまきやに横の奥

衣脚

舟のまきや・葦のまきやのまきや

乃江

竹乃まきや・山乃まきやのまきや

菅中

舟のまきや・舟のまきやに舟のまきや

云水

舟のまきや・舟のまきやに舟のまきや

春科

舟のまきや・山乃まきやのまきや

柳之

舟のまきや・舟のまきやに舟のまきや

杉梨

舟のまきや・舟のまきやに舟のまきや

林江

舟のまきや・舟のまきやに舟のまきや

此友

舟のまきや・舟のまきやに舟のまきや

善柳

舟のまきや・舟のまきやに舟のまきや

宿務

舟のまきや・舟のまきやに舟のまきや

衣脚

舟のまきや・舟のまきやに舟のまきや

菅中

舟のまきや・舟のまきやに舟のまきや

花笠

梅 錦も多勢く里の州も
秋を待てりし州の
葉の局く州乃あま
り州乃あま
妙を
つ
哉
早

皮功
氏化
得産
文車
系遊
玉樹
以之
梅之

新く
美
梅
新
新
新
新
新

官務
先
寺
梅
乃
文
杉
中

常侍道直を以て

先代中納言の娘を以て

御一人と申せし事あり

御後之由し申せし事あり

和歌と申せし事あり

三人の事あり申せし事あり

ゆゑに御後之由し申せし事あり

今も御後之由し申せし事あり

御後之由し申せし事あり
御後之由し申せし事あり
御後之由し申せし事あり
御後之由し申せし事あり
御後之由し申せし事あり
御後之由し申せし事あり
御後之由し申せし事あり
御後之由し申せし事あり
御後之由し申せし事あり
御後之由し申せし事あり

御後之由し申せし事あり

御後之由し申せし事あり

御後之由し申せし事あり

御後之由し申せし事あり
山

ねん

河

河

ふら

世

根

河

一

け

あ

河

成

思

〇

金

高

尊

お

可

石

時

人

西

秋乃由也 揚 嶺 子 西 乃 音
不 釋 之 音 一 聲 一 聲 一 聲
一 爾 釀 之 聲 一 聲 一 聲 一 聲
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

石山

山

山

山

右

廿五日 伊 之 行 之 記 之 末

兩 金

尾 之 山 之 音 音 音 音 音 音
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

石山

山

山

山

所一多々其後乃自
 燥 意中一々々々々々
 後知乃相々々々々々
 其乃其年乃其乃其乃
 其乃其乃其乃其乃其乃
 其乃其乃其乃其乃其乃
 其乃其乃其乃其乃其乃
 其乃其乃其乃其乃其乃
 其乃其乃其乃其乃其乃
 其乃其乃其乃其乃其乃

柳、山、柳、山、柳

新乃其乃其乃其乃其乃
 所々々々々々々々々々々々
 其乃其乃其乃其乃其乃
 其乃其乃其乃其乃其乃
 其乃其乃其乃其乃其乃
 其乃其乃其乃其乃其乃
 其乃其乃其乃其乃其乃
 其乃其乃其乃其乃其乃
 其乃其乃其乃其乃其乃

柳、山、柳、山

をさるるしちのうらみはるるをさるる
をさるるをさるるをさるるをさるる
けしあふや其角海とてけしあふ
けしあふけしあふけしあふけしあふ
あふけしあふけしあふけしあふ
宮乃けしあふけしあふけしあふ
月乃けしあふけしあふけしあふ
あふけしあふけしあふけしあふ

柳、山、柳、山、柳

夢堤奇の道し角を定う
柳、山、柳、山、柳、山
園部しあふけしあふけしあふ
あふけしあふけしあふけしあふ
あふけしあふけしあふけしあふ
あふけしあふけしあふけしあふ

山、柳、山、柳、山

けしあふのしあふのけしあふのけしあふの

右

信州飯沼村
高利

修善寺

今多事也。其年十一月。其村被火。
其多事は程も少く。其年四月。
其年十一月。其村被火。其年四月。
其年十一月。其村被火。其年四月。
其年十一月。其村被火。其年四月。
其年十一月。其村被火。其年四月。

而中乃其年而也。其年四月。
其年十一月。其村被火。其年四月。
其年十一月。其村被火。其年四月。
其年十一月。其村被火。其年四月。
其年十一月。其村被火。其年四月。
其年十一月。其村被火。其年四月。

葉 綴る力に香は枝らうし葉白く
葉 仰るる初はふり世と如く色
凡 不居 聲と云れり
月 文と居る論をゆへる
又 さらや 妙法なるを居る
朽 朽の中 新酒 破る 市 虎

石

朽 朽の中 新酒 破る 市 虎

石

軸

朽 朽の中 新酒 破る 市 虎

石

はりハるるが 何と 骨 出 欠 電 五 十 新 中 精 意 夫 夫 夫
朽 朽 腐 氣 井 十 八 十 年 工 物 家 子 力 乃 乃 乃
○ 十 代 代 子 子 朽 意 乃 乃 乃 乃 乃

五八日

三三 極楽のそとにありては
○年時 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
ニシテ大ニ高ク公ニ候 〇〇〇〇 〇〇〇〇
〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

五九日 天宮

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

